

WUNIERSAIHAN

1. 事業実施の目的

中国内モンゴル地域を事例として、1980 年代以降のオイラト・モンゴル牧畜社会において、「僧院外」で再活性化しているチベット・モンゴル仏教の実態を明らかにすることを目的とした。

2. 実施場所

中国内モンゴル自治区アラシャ盟、東チベット

3. 実施期日

2025 年 8 月 1 日 (金) ～ 2025 年 10 月 1 日 (水)

4. 成果報告

●事業の概要

本調査活動では、1. 牧畜民の家庭での滞在・聞き取りおよび宗教儀礼の観察 2. 牧畜民の東チベットへの巡礼に同行 3. 宗教儀礼に関する文献史資料の収集などを実施した。

1 牧畜民の家庭での滞在・聞き取りおよび宗教儀礼の観察

(1) 牧畜民が主導する宗教実践

1980 年代以降の中国における宗教の再活性化について、従来の研究は宗教施設や宗教職能者に焦点を当ててきた。しかし今回の派遣調査を通じて、1980 年代以降の内モンゴル・アラシャでは、ラマ僧のような宗教職能者よりも牧畜民が宗教実践を主導しているのではないか、という仮説を立てるに至った。

牧畜民は年に 1～2 回、ラマ僧を自宅に招いて儀礼を行う。季節ごとの儀礼や通年の儀礼¹に加え、子供の断髪式、結婚式、葬儀、新居への引っ越しや車の購入、人や家畜の急病といった時にもラマ僧を招き、それぞれの経を唱えてもらう。

ここで言う「主導する」とは、単にラマ僧を呼ぶ側という意味ではない。それは、牧畜民側が主体的に儀礼の時期・目的・場所を決め、宗教実践の時間と空間を構築する側であることを指している。牧畜民は、自らの生活リズムや牧草地の循環に合わせて儀礼を企画し、ラマ僧を招くことによりそれを宗教的な出来事へと転化する。この構造の中で、宗教実践の空間は僧院という宗教的空間から、家やノッタグ (Mo. nutag: 居住地と放牧および地、「故郷」とも訳される) といった草原の生活空間へと移されている。また、宗教実践の主導権を握るのは、はラマ僧ではなく牧畜民の側にあった。言い換えるならば、草原における僧院外の宗教実践においては、俗人である牧畜民と宗教的職能者であるラマ僧との間で主導権が逆転しているのである。

¹ 季節ごとに行われる儀礼としては、3～6月は、ラマ僧を招待してオボー、土地神や水神 (Mo. Gajar usu taqiqu) を祭る。7～9月は基本、ナダムとチベットへの巡礼の季節。10～11月は、仏や法護尊の祭祀 (Mo. Burqan taqiqu)、ダラルガ・アブフ (Mo. DalalGa abqu) と呼ばれる「繁栄を招く」儀礼が行う。12 月 (冬至) から新年まではジルイン・ザサル (Mo. Jil-un jasal) と呼ばれる占星術における新年の厄払い儀式が行う。年常行われるのは、「ジヨド (Mo. Chöd, Tib. gcod)」と呼ばれる施身法の供養会「ツォクライ (Mo. Choglai, Tib. Tshogs)」と、『金光明経』 (Mo. Altangerel, Tib. 'phags pa gser 'od dam pa) を唱えてもらう儀礼。

(2) 家という儀礼の場

本調査においては、8戸の家庭で調査を行った。それぞれの家庭において、唱える経や行われる儀式の内容に違いはあるものの、いずれも改革開放以降、20年以上にわたって、ほとんど途切れることなくラマ僧を招いてきた点では共通している。驚いたのは、牧畜民宅における儀礼において、ラマ僧が家の中で経を唱えている間、その部屋に入って経を聴く家族はほとんどいなかったことだ。牧畜民たちによると、明らかに何か不幸があつて、厄払いを行う場合は、読経の場にはいなければならないようだ。しかし季節ごとに行う儀礼においては、読経の場に居合わせる必要はないようだ。場合によっては、特定の儀礼を行う際、ラマ僧が家主を外に探しに行くこともあった。このようなさほど重要だとは思えない儀礼のために牧民たちは、なぜラマ僧をわざわざ自宅に呼ぶのだろうか。牧畜民はその理由について、「仏や護法尊、土地神、精霊たちを招来して、供養するんだよ」「間をあけると何か欠けた気がする、旱魃や家畜に対して他の不幸が起こるからだよ」などと説明してくれた。

ここからわかるのは、第一に、牧畜民たちの自宅は単なる生活の場ではなく、宗教的・象徴的な空間としても機能しているということだ。家で行われる儀礼は、閉じた家庭内の出来事にとどまらず、その祈りや供物はノタグの主（神）や精霊へと捧げられ、家そのものがノタグに結びつく宗教的な結節点として機能しているのである。

こうした往還の象徴的中心に位置づけられるのが ボンバ (Mo. bumba Tib. ‘bum pa : 壺) と呼ばれる、通常は屋外のやや高い位置に石を積んで構築した小規模なオボーのようなものである。石の下には壺が埋められている。その壺の内部には護符や供物、種々の「宝物」が納められている。現地では近年、ボンバを設置する家が増加しており、これらは土地と水の精力 (Mo. šim-e) を定着させるためだということだ。ここから牧畜民たちがノタグに対して継続的に関わる必要性があると考えていることが見て取ることができる。

また、儀礼の際には複数種のバリン (Mo. baling Tib. gdor ma) と呼ばれる小麦を練ってつくった円筒状の供物が作られる。中でも「地霊のバリン」 (Mo. Sibdag dorma Tib. gzhi bdag gdor ma) は、儀礼時に家の外の南西に据えられる。「地霊のバリン」やボンバは家の内部で行われる祈りと相補的に働き、家とノタグとの間の霊的・物的往還があることを意味している。

また、多くの家では、スル (Mo. sūr, Tib. gsur) やサン (Mo. sang, Tib. bsang) と呼ばれる献香の儀礼が日常的に行われている。これらは儀礼の開始時や途中、あるいは日々の祈りの一環として行われ、乳製品や薬草などを火に燃やして香煙を天へと立ち上らせる行為である。その煙は神霊を招き、空間を浄め、家とノタグを結ぶ媒介として働く。

このような家での儀礼実践はノタグを宗教の力で活性化させる行為であり、同時にノタグの霊力によって家が守られていることを確かめる過程でもある。

(3) 可変的なラマ僧の立場

本調査において明らかになった第二の点は、僧院外の牧民宅における儀礼において、ラマ僧の立場が、俗人と逆転することがあるということだった。

ラマ僧たちは「家主を喜ばせることも功德 (Mo. buyan) になる」と語っていたが、驚いたことに彼らは、牧畜民宅において、主客が逆転するような奉仕活動を行っていたのである。もっとも彼らは経を唱える時間以外では客人として扱われていた。アラシャ地方では、儀礼後に「ツァイ・オーフ」 (Mo. čai uuGuqu、茶を飲むの意) と呼ばれる茶会が行われる。これは単な

る家庭内の茶話会ではなく、ホストの都合や人間関係に応じて、10人から30人ほどが集まる小規模な宴会になることが多い。筆者の調査では、ある牧畜民宅で、ガチャー（村）やバラガス（鎮）の首長といった地方政府関係者も参加していた。

こうした場において、ラマ僧は形式上、最も奥の上座に座するのであるが、酒を勧められたり、人々と冗談を交わしたりするなど、日常的な社交に組み込まれる。興味深いのは、若年のラマ僧が、年上の家主に酒を捧げる（Mo. ariki bariqu）行為が見られたことだ。また、ラマ僧が都市から牧畜民の家に行く際には、家主の依頼に応じて土産を持参することもあった。さらにも若いラマ僧が牧民の家で家畜の世話をしたり、ポーズ（モンゴル式の蒸し餃子）の調理を手伝ったりしていた。すなわちラマ僧は宗教的指導者として尊敬をされる一方で、牧畜民たちの日常生活を助ける奉仕者としての役割を同時に担っていたのである。

以上のことからわかるのは、牧畜民とラマ僧の関係は、可変的であるということだ。ラマ僧は、牧畜民の家で師僧であり客として招かれる一方で、家事の手伝いをする牧民に尽くす奉仕者としての役割を求められる。もちろん、ラマ僧も招待を断ることは可能であるが、収入や地域内の信頼関係に影響するため、できる限り牧畜民との良好な関係を保つ必要があるようだ。つまり、宗教職能者は儀礼の場においても必ずしも絶対的な権威者ではなく、牧畜民と協力して宗教実践を行う、比較的同等の存在であるといえよう。

このように僧院外で行われる日常の儀礼実践において、ラマ僧の権威は限定的であった。もちろん師僧であるラマ僧から加持祈祷をしてもらうために、牧畜民やラマ僧が直接に師僧を訪ねたり、チベットへ巡礼に赴いたりするなど、明らかにラマ僧の立場が上に来るケースもある。

2 東チベットへの巡礼

本調査期間中、報告者は、アラシャ盟の牧畜民とともに、聖地として知られる東チベットのクンブム寺、シャチュン寺、ラブラン寺への巡礼（約700～1,070km）に同行した。巡礼では、僧院での礼拝、布施、経典・儀礼用品の購入が行われ、僧院内外の宗教実践との連続性が確認された。

牧畜民は僧院到着後、ゴラ（Mo. goriy_a, Tib. sgor ra）を巡り、各経堂でバターの灯明を灯した後、化身ラマに礼拝する。クンブム寺およびラブラン寺にはモンゴル人のラマ僧が在籍しており、牧畜民は事前にラマ僧と連絡を取りつつ、化身ラマたちの都合を確認し、直接礼拝することが多かった。

また、信徒が家で用いる儀礼用品：薬草、香、バターの灯明の燭台、ツァンパ（Tib. rtsam pa, 大麦を炒って粉）などを寺院で購入し、化身ラマに礼拝する実践は、家主が主導する宗教実践とは真逆の位相であった。すなわち、聖なる寺院に御座す化身ラマへの礼拝は、明らかにラマ僧—宗教的職能者の立場が上位にあった。

このような巡礼は、日常の儀礼の場では叶わない宗教的体験を得る場でもある。牧民や内モンゴルのラマ僧たちが直接、チベットの高僧を訪ねる、あるいはチベットの寺院へ巡礼に行くことで、より強い宗教的な恍惚感を得ることが出来るようだ。これによって地元に戻ったあとの家庭内での、宗教実践への情熱を強化することができるように思えた。

3 文献・史料収集

内モンゴル自治区およびアラシャ盟の図書館・文献室において、1980年代以降の宗教復興に関する史料を収集した。また、ラマ僧が使用するチベット語経典を撮影・記録した。現行の多くの

経典は、文革期に隠されていた、残存経典や記憶に基づき手書きで補われたものであり、誤写も見られる。近年では、若手ラマ僧が iPad やスマホで経典を読誦することも増えている。また、ラマ僧が牧畜民の家に招かれて読経する際には、家に所蔵されている経典を用いることが多く、自身の経典を持参しない。たとえそれが古い写本であっても、家の経典を唱えるという慣習は、信仰実践における宗教的権威の共有と、家の宗教的主体性を示していると言える。

●本事業の実施によって得られた成果

本派遣事業を通じて、内モンゴル・アラシャ地域における僧院外の宗教実践の具体的事例を詳細に観察・記録することができた。牧畜民の自宅で行われる季節ごとの儀礼、通年儀礼、家主主導の宗教実践、ラマ僧の権威の相対性、ならびに東チベット巡礼の同行観察に基づき、宗教実践の時間・空間・権威構造に関する豊富なデータを得た。また、儀礼用品、経典、バリンやブンバなどの物的資料、経典や儀礼の写真記録を収集することができた。

これらの成果は、博士論文における僧院外の宗教実践の具体的な事例分析や理論的議論に直接活用可能である。さらに、収集資料は今後の学会発表や論文執筆に利用でき、国内外の学術コミュニティへの還元も期待される。総じて、本派遣事業は博士論文研究の予備調査として、今後の本調査にとっても貴重な基礎的成果をもたらした。なお、予備調査で得た成果を、2025 年日本モンゴル学会秋季大会で発表することも予定している。

●本事業について

本事業のおかげで博士論文の執筆に関わる有意義なデータを収集することができた。記して感謝の意を表したい。